

## 短歌知らずが歌を語る

北 杜夫



私と短歌のふれあいはいごく短かい。昭和二十年五月二十五日夜半の空襲で自宅も隣りにあった病院も全焼したあと、私は旧制松本高校の寮に入る前、しばらく兄嫁の実家に世話になっていた。その家には茂吉の『寒雲』があった。私はそれを読み、なかならずく連作「木芽」にいたく感動した。それが父茂吉の歌を読んだ最初である。昆虫マニアで理科少年であった私が、茂吉の中期の作品にどうしてあれほど打たれたのかは今もって分らない。或いは血のささやきであつたかも知れぬ。

とにかく私はそれからほつと稚拙な短歌を作りだしたのである。二年生になった頃、どうしても怖ろしい父親に見て貰いたい気持が高ぶって、思いきって歌稿を山形の太石田に疎開中の父に送った。私を狂喜させたことに、子供の頃から茂吉が弟子に歌の添削をしてやったときと同様、よいと思われる歌に○印がつけられていた。◎印のものもあつた。しかも「父の赤光時代の歌に似ている」などとも書かれていた。以来、私はもつと短歌を作り、かつ主に「アララギ」の主だった人の歌をも読みだした。

ところが三年生になった時、父は上級学校のことを心配し、成績は何番であるか知らせろと手紙をくれた。私は中学まで優等生であつたのだが、高校へ入ってから寮の委員などし、学校へ通うよりカ

ボチャの買出しへ行くほうが多かつたし、短歌どころか文学青年となつて小説、哲学の本を読むのに忙しく、完全に劣等生になつてい。それで「成績は発表されぬ」とかごまかしたが、父は知合の教授に私の成績を調べさせた。すると、ビリから数えたほうが早い成績ではないか。更に私が、医学部は自信なかつたので、「ファアブルのような道を進みたいから動物学を受けたい」と言いだすと、たちまち激怒し、「お前は馬鹿になつた。どうしても医者になれ。短歌などすぐやめろ！」という意の、炎のような手紙を寄こした。私は打ちのめされ、動物学をあきらめた。短歌はそれでもしばらく続けていたが、三年生の半ば頃、限界を感じて、やめてしまった。従つて私が短歌と縁があつたのは二年半くらいということになる。

それでも作家になつてからかなり経ち、ソウ病となつてその頃の歌すべてを収めた歌集『寂光』を出した。臆面もない恥知らずといふべきである。山本健吉さんは短歌や俳句をあげる週刊誌のコラムを持つていたが、私の歌一首をとりにあげてくださった。しかし、そのあとお目にかかる、「君、何でもずーっと長く続けねば駄目なものだよ」と叱られてしまった。

私は短歌雑誌が送られてきても、自分には縁がないものと一切目を通さずしてきた。最近になつて『茂吉』四部作の評伝を書きだして

から、ようやくそういうものに目を通しだした。好きであった長塚節ながつか せつなどなつかしかったし、土屋文明とやふみその他の「アララギ」の歌人の歌を改めて鑑賞し直したりした。

そして書くのも恥ずかしいことに、塚本邦雄、岡井隆などのすぐれた歌人の歌にも初めて接したのである。塚本さんの「茂吉秀歌」は、私の茂吉評伝にあまりにも引用しすぎたので、編集者から注意を受けたほどだし、いつぞや茂吉短歌賞を受けられたときの幾首かには、そうぞう「壯絶なまでの美しさを感じた。岡井さんの歌も好きで、その人物も飄飄ひょうひょうとしており、巨泉の「はっぱふみふみ」の歌を取りあげているのには感心もした。

「アララギ」が廃刊になったときは、やはり寂しい思いがした。だが、すべての事物には「初まり」があり、そして「終り」があるものだ。それに土屋さんが亡くなったあとは、やはり分裂するのも無理なからう。考えてみれば、「アララギ」はかなりの期間、歌壇の中心であり、茂吉を中心として威張っていたとも言える。終焉しゆうえんを迎えるのもやむを得ないことであろう。

私は齢をとってから、短歌をやめたことを後悔した。老残の身となると、書きなぐりの雑文こそ書けるものの、小説はごく短かい短篇たんぺんくらいしか書けなくなった。短歌ならば、こう言っては失礼だが短い形式だから、作れるのではないか。そう思ってたわむれにちつとばかり作ってみたことはある。だが、山本健吉さんの言葉どおり、ずっと続けていなければ駄目なものだ。とても旧制高校時代の作品にも及ばない。

日本人は体内に五・七、或いは七・五のリズムがおのずから具そなわっているように思われる。それが子供のときに意味も分らずにやつ

た百人一首などによって育てられるのではないか。それなのに、戸籍上は一応茂吉の子となっているのに、この私のみじめな有様はどうしたことか。

このように自戒すると、口惜しくなって、かつての私の歌を無理にでも讃ほめたくなる。事実、昨年しんねんの末、自歌集『寂光』を実に久しぶりにめくっていたら、今の年齢となった私も納得できるような歌が、ほんの数首だけ見つかったのである。

満たされぬ心にをれば小ちさき手に蟬せみを鳴かせて童来どうらいにけり

楡落葉やなぎのふちの音もこそすれあきらめに似しわが歩みここにとどまる

山の湯にしましまなこをつむりたり今のうつつの湯の流る音

あかときのこの静けさや飯炊いくと集めし杉の落葉のしめり

山かせのつたふる音をさびしみて硫黄りゅうわうの湯あみ一夜ひとよをねむる

とどまらぬものはかなき湯あみとにいで湯はひとり湧わきぬいで湯は

これらは私自身が好きで当時は自信を持っていた歌である。

ところが茂吉は、これらの歌をさして評価せず。

萌もえいでし青きがうへに降る雪を床より出でて見てゐる吾は

というような歌に◎印をつけたものだ。

そのときは不満だったが、今にして思えば「生活をそのまま歌え」と言ってきたように、茂吉自身否定的であった『赤光』調の感傷に息子を溺ならせまいと意図したのではあるまいか。

(きた・もりお 作家)